

● 奈良県・三郷町 「雪駄」

DESIGN SETTA SANGO



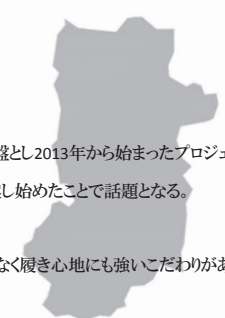
江戸時代から続く鼻緒履き物の町。地場産業である草履・雪駄の製造技術を基盤とし2013年から始まったプロジェクト。地元の人気カフェと共同で地域ブランドとして発信、雪駄の新しいスタイルを提案し始めたことで話題となる。

「鼻緒のある履き物を現代の日常に取り戻す」をコンセプトとしている。

限られた職人にしかできない技術と機能美を追求したデザインはオシャレだけでなく履き心地にも強いこだわりがある。

長く、日常の一部として履き続けてほしいという想いを込めて。

2017年4月にはイタリア・ミラノサローネで開催された「JAPAN DESIGN WEEK in Milano」に出展。



● 滋賀県・愛荘町 「麻織物」

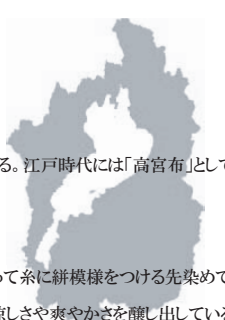
近江上布



愛荘町を含む滋賀県の湖東地域は室町時代から続く良質な麻織物の産地である。江戸時代には「高宮布」として彦根藩が保護し幕府への献上品に使われた。

昭和52年には「近江上布」が国の伝統的工芸品に指定を受けた。

近江上布には緋と生平があり、緋は伝統的な技法「櫛押捺染」「型紙捺染」によって糸に緋模様をつける先染めで染められている。淡い色合いの非常に上品な緋模様が、夏の衣料として一段と涼しさや爽やかさを醸し出している。



伝統という信頼があるから、新たなことに挑戦できる。

近江の麻織物と大和の雪駄が出会い、

新しい極上の履き物が生まれました。



● 近江上布 ビンテージ 鼻緒シリーズ
Omi-Jofu vintage straps series

明治17年から平成14年まで滋賀県愛荘町南野々目で操業していた「野々捨商店」。近江上布の産地であった湖東地域のなかでも、特に美しい多色柄で人気があった商店だったという。廃業の際に染色後の糸の状態に残されていたものを譲り受け、織りあげた生地を鼻緒に再利用した。近江上布の機屋が極端に減り、熟練の職人の数が少なくなった現在、このような凝った意匠の型紙を染めることは非常に難しくなっており、デッドストック品となっている。

● 野々捨カタガミ 鼻緒シリーズ
Nonosute stencil paper straps series

借しくも廃業となった「野々捨商店」が残したものに型紙捺染に使う型紙がある。6000枚にものぼる型紙には、和柄や幾何学など現在にも通ずる斬新なデザインがあり、近年「のすておりがみ」として復刻されるなど注目を集めている。この野々捨型紙の、デザインを麻布にプリントし、鼻緒に仕上げた。伝統を感じさせながらも斬新な1足。

